

南英謙宗の五位説に関する一考察

——重離暈變説をめぐって——

松 田 陽 志

一 はじめに

中国日本における偏正五位説の展開及びその解釈を考へるとき常に論議される、いわゆる第四位の名稱による正統対異説という問題は、覚範慧洪（一〇七一—一二二八）の『石門文字禪』二五の次の一節によって、初めて具体的な問題として取り上げられる。

道愈陵遲、至於列位之名件、亦訛乱不次。如正中偏、偏中正、又正中來、偏中至、然後以兼中到、總成五。今乃易偏中至為兼中矣、不曉其何義耶。而老師大衲亦恬然不知怪為可笑也。

（石門文字禪卷二五、題雲居弘覺禪師語錄 『禪門逸書』初編、第四冊、三四四頁）

この一節は、『人天眼目』にも収載されることで広く目に触れることになり、第四位を兼中至とする五位説を異説として退け、偏中至を以て曹洞五位の正統説と認めるといふ、五

位説解釈の基本的視點の根拠として用いられている。これによれば覚範當時の宋代初期の五位説が兼中至を用いるものとして広く用いられていたことが窺えるが、それを是正しようとした覚範自身の内容的根拠は明確ではなく、詳述は避けるが、むしろ、後代曹洞五位の立場から異説として批判される、兼中至をとる五位説の段階的解釈と内容的に類似する箇所⁽¹⁾もみられ、又『人天眼目』によれば、覚範の言葉をあげ、それに従って曹山の「逐位頌」を偏中至として紹介しながら、その他の覚範以後の五位説にまで偏中至説が取り入れられることはなかった事等から考えれば、少なくとも覚範の偏中至正統説自体は必ずしも内容解釈上の相違を兼中至による五位説に対して、積極的に打ち出そうとする後代の論義と一致するとは言えず、又形式的にも以降の中国における五位説の解釈に大きな影響を与えたものとは言えないのではないかと思われる。

このような中国における五位説の状況については、特に兼中至を用いる五位説について改めて綿密に検討する必要があるが、筆者が問題としたいのは、この覚範の言葉が兼中至を用いる五位説を全て異説として批判的に総括する考え方として、特に日本における五位説の展開を第四位の名称によって形式的に解釈判断する際の、重要な論拠とされてきた基本的視点⁽²⁾にある。結論を先に言えば、筆者はこのような五位説に対する極めて画一的な見方は、実際の五位説全体の解釈を見誤るものだと思うし、中でも今回取り上げる南北朝より室町期の、五位説が曹洞門の教学の主流となっていた時期の現状とは相容れないものと考ええる。

そこで、本論考ではこのことの具体的な検証のためにも、当時の最も代表的な五位説研究者で、それまで主流化していた兼中至による五位説を、偏中至の本来の曹洞五位説に復古したとの評価⁽³⁾を受ける南英謙宗（一三八七—一四六〇）の五位説の特質を、特に「宝鏡三昧」の一節より導かれる五位の重離疊変説によって考えてみたい。又、偏中至を用いて部分的にも曹洞五位に復古しようとしたという評価⁽⁴⁾を受けながら、南英によって厳しく批判される省灯首座（不詳）の疊変説についても検討することで、当時の五位説研究における第四位の名称による問題意識についても検討してみたい。多くの五位説の中でこれを取り上げる所以は、この易卦と五位とを結び

つける重離疊変説が、室町期の禅宗界全般における易学をはじめとする外典受容の趨勢の中で、特に曹洞門の教学の主流となっていく五位説の論議の中心として行なわれ⁽⁵⁾、その原点として取り上げられているのが他ならぬ覚範の疊変説であることによる。

二 覚範慧洪の重離疊変説

覚範慧洪による『智証伝』は、宝鏡三昧の一節「重離六爻、偏正回互、疊而為三、変尺成五」を易卦と五位との連関として具体的に説いたものとして、現在の所最も古いもの⁽⁶⁾であり、これより取り上げる南英をはじめとする日本の重離疊変説の展開の原点となっている。具体的には、重離の卦を心の譬説と位置付けて、まずその六爻三三の二・三・四爻（内互体）によって巽三「正中偏」を導き、次に三・四・五爻（外互体）によって兌三「偏中正」を導き、これと重離三三「兼中到」を加えて「疊而為三」とし、更にその兌を上⁽⁷⁾に巽を下にすることで太過三三「正中来」、又逆に巽を上⁽⁷⁾に兌を下にして中孚三三「偏中至」として「変尺成五」を説明するのであるが、これらの疊変説を根拠づける易卦と五位との内容的分析はみられない。ただ、変化の根本である重離を兼中に配して展開するところに、先に挙げた『石門文字禅』にみえる兼中至を偏中至とすることで、第四位を兼中到ではな

く、正中来と相對させる考え方が反映されたものと考えることが出来る。

三 『偏正五位図説詰難』における省灯の重離疊変説

南英の著作の一つである『偏正五位図説詰難』⁽⁸⁾は、中峰下明叟齊哲の法嗣である無尽省灯の著した『偏正五位図説』に對して、南英が厳しく批判を加えたもので、当時の重離疊変による五位説研究の状況やそれに対する南英の見解を窺うことが出来る。省灯については、生没年等は不詳であるが、春屋妙葩、龍湫周沢等に参学した後、曹洞宗宏智派の東陵永瑛の下に長く留まっております、五位説に関する参学もこの東陵会下でその多くを果したものとされる⁽⁹⁾。ただ、省灯自身の言葉によれば、その東陵の五位説に従ったものではなくむしろ、当時広く行なわれていた五位説に對する疑問を解くことができず、延文三年(一二五八)章上人との会話中に忽然として五位説の疊變の旨を自分のものとし、その五年後の貞治二年(一二六三)に『偏正五位図説』を表している⁽¹⁰⁾。したがって直接に省灯の五位説を東陵等の宏智派の五位説と直接に結びつけて捉えることはできないが、省灯は自身の五位説が師から承けたものではないことを意識し、東陵の師の雲外雲岫(一二四二—一二三四)の『宝鏡三昧玄義』等の所説と自分の

説が相合していることを挙げて、自説の間接的な証明を求めており⁽¹¹⁾、この点で何らかの関連性を考えることができる。又この省灯の五位説に對して、南英は跋文で、

明峯下有偏正五位図説。嘗洞下無名氏。詰難之。予因集之。頗似省燈首座之図説。而今見此図説。不免斥其齷齪矣。蓋非論宗旨之壺奧。但名相之訛耳。⁽¹²⁾

と述べ、かつて洞下無名氏なる人が批判した明峰下の『偏正五位図説』とこの省灯の図説が類似していることを指摘しており⁽¹³⁾、これらによれば、必ずしも当時の五位説の曹洞門における重離疊變説の展開にも無関係ではなく、ここに南英が省灯の図説より八十八年後の宝徳三年(一二五一)に『図説詰難』を著す、直接の動機があったと推測することができる。

そこではじめに、省灯による「重離六爻、偏正回互、疊而為三、變尺成五」の具体的な疊變による五位解釈を挙げた。紙幅の都合上、詳述はさけるが、まず重離の卦を疊變の基本に置くのは、離卦が六十四卦中、唯一五位説では正位を示す陰爻が中にあることによる⁽¹⁴⁾、偏正回互を陰爻と陽爻との関わりにみて、この重離の内卦の初爻と二爻により少陰二を出し、以後順次二坎と三爻の少陽二を出し、これを外卦によっても行なうことで、二つづつの少陰、少陽ができる。

これにそれぞれ一陽・一陰を重ねることで離三〔正中來〕、坎三〔偏中至〕、震三〔正中偏〕、巽三〔偏中正〕の四卦を導

く(卦の種類としては四種だが、その順次により八卦ができる)。この内、離卦は変化の根源として挙げ「三と為る」のであるから、他の三卦をもって「晝而為三」を説く。又「変尽成五」とは、先にできた四卦によって、他と相對することのない兼中中の最妙最玄の所を導くとして、四卦中の六つの陽爻を變じ尽くして陰爻にすることで、坤☷の卦を出し、これを兼中到として⁽¹⁶⁾いる。

これらの省灯の重離よりの晝変説は、必ずしも易卦の五位との關係性を内容的解釈の上で踏まえたものとは言えず、元々の宝鏡三昧の一節の解釈からはかなり逸脱した独自のものと言え、南英からも厳しい批判を受けるのであるが、自身の言葉によれば五卦の順次が曹山の五位君臣旨訣や五相偈等と相應することが根拠として述べられており、⁽¹⁷⁾何らかの易卦と五位との典拠に基づいていることが推測される。

又、この晝変説で省灯は、先にできた四卦の陽爻の変化によって坤卦を導くという方法にも反映されているように、特に第四位を先の覚範の『石門文字禪』の言葉にならって偏中至とすることで、兼中到と相對する兼中至の立場を否定している。省灯は

寂音正五位訛。其略曰。今易偏中至。為兼中至。不曉其
 何義耶。而老師大衲恬然不知怪。為可笑也。同寂音之意第
 一第二卦圈。名義皆反相對。第三第四卦圈兒。亦變相對。而名

獨不對乎。故以兼字為訛也。⁽¹⁸⁾

と述べ、覚範(寂音)の偏中至説の根拠が、『曹山五相偈』の図相や易卦の相對にあるものとして解釈し、その形式性によって第四位を偏中至とする事で、自らの晝変説の証明として⁽¹⁹⁾いる。このことは、省灯が晝変説によって五位を説く場合、内容的解釈よりも図相や易卦の相對を特に重要視していることを示すもので、南英によって

若參得洞上宗旨。而自其宗旨。正彼名相訛亂則可也。只見待對之形。而揣度以正之。何不思之甚哉。⁽¹⁹⁾

と厳しい批判を受けることになる。事実、『図説』において、省灯は偏中至とする内容的根拠を『曹山君臣旨訣』の五位の配列や相應⁽²⁰⁾に置いているものの、あくまで第三位正中來との相對を説くためにこれを依用し、必ずしも偏中至と兼中至とい相違を各々の内容的分析に基づいて説いているわけではない(したがって覚範の言葉も自説の易卦や図相の整合性の証明に援用されているに過ぎないものと言わざるをえない)。そこで、省灯自身の五位説ではないが『図説』では宏智派の雲外雲岫の五位説を取り上げているので、次にこれに対する省灯の見解について考えたい。

省灯は自身の説が師より承けたものではないことにコンプレックスを感じていたのか、まず雲外雲岫の『宝鏡三昧玄義』による解釈を挙げ、

雲外岫禪師曰。重離易之二五。中正之謂也。又曰。疊而為三
者。正中偏。偏中正。正中来也。変尺成五者。兼中至。兼中
到。通_レ前_レ為_レ五也。此一説雖_レ有_レ実。理疏_三略文義_二之故。理尚
有_レ所_レ不_レ通_二。

と、第四位を兼中至として、自説の解釈とは大きく相違するものにも関わらず、論理的に問題があるとはいへ、理解を示しており、更に月の満ち欠けに準えて重離の一爻ずつの変爻による五位の互体より五位に相当する五卦を導く「八卦納甲図」を部分的ではあるが雲外の言葉と共に紹介している。⁽²¹⁾ 紙幅の都合上、詳述しないが、結果として導きだされる五卦、五位、凶相の相応は震三〔正中偏・●〕巽三〔偏中正・●〕離三〔正中来・虚位〕乾三〔兼中至・○〕坤三〔兼中到・●〕となっており、特に月の満ち欠けを修行の功勳に当てはめ、更に正中来を虚位として、その本証的存在として設定するとい⁽²²⁾う、典型的な兼中至による段階的解釈であることがわかる。⁽²³⁾
この解釈は全体的に省灯自身の疊変説とはかなり性格の異なるものであるように思われるが、雲外の五位と易卦の相応と比較してみると、第四位を省灯が第三位離との相対によって坎としているのに対し、雲外は第五位坤に相対する乾とな⁽²⁴⁾っている点が異なっており、後は一致している点から考えれば、省灯が疊変説の基礎にした易卦が雲外系統のものであったことが推測できる。

以上、省灯の五位説について結論すれば、凶相の相対と各五位説との相応を重視し、覚範の説を引いて第四位を偏中至としながらも、内容的には雲外の兼中至を用いる段階的な五位説を批判的に取り上げる事無く、その影響を少なからず受けていたと考えられる。又省灯は第四位は易卦を坎として偏中至に代えたものの、第三位は離のままであり、雲外が正中来・離を疊変の根源として他の四位の本証的存在を示している主旨を反映させるものであることからすれば、易卦・凶相の面に於いても段階的性格の跡を残しており、第四位の兼中至を批判して偏中至とすることによって五位全体の内容的転換を計ろうとしたものではないと考えてよいものと思われる。

四 『重離疊変訣』における南英の重離疊変説

次に、南英自身の疊変説を、その著作である『重離疊変訣』⁽²⁴⁾について検討したい。この書は、重離疊変説の解釈としては最も代表的なものとして後代の多くの文献によって取り上げられ、その写本等も多く残されている。

具体的には「疊而為三」を、重離三三〔兼中到〕の卦の二爻を初爻に重ね、四爻を三爻に重ね、上爻を五爻に重ねるとい⁽²⁵⁾う、いわば疊み下げることにより六爻が三爻となり巽三〔正中偏〕を導き、又逆に初爻に二爻を重ね、三爻に四爻を

重ね、五爻に上爻を重ねて疊み上げることによって兌三〔偏中正〕を導き、これにより三つの意味を持たせる。一には六爻が三爻に爻を導くこと。二に疊むことにより生じた巽、兌に元々の離を加えて三卦ができること。三には巽、兌と最初の巽を導いたとき、その裏には兌ができることから、巽を上にし兌を下に置き換えることで中孚三三ができて、都合巽、兌、中孚の三卦ができることをいう。次に、重離を疊んで巽、兌を生ずる時の表裏の卦の有り様を上下に置き換えることにより中孚三三〔偏中正〕、大過三三〔正中來〕の卦ができ、結果的に最初の重離の卦の各爻が全て変じているとして「変尽成五」を説明している。⁽²⁵⁾

この南英の疊変説は、基本的に先に挙げた覚範の『智証伝』中の疊変説に依拠するものであり、したがって導きだされる易卦も覚範の説に準じて解釈を行なっている。このことは、省灯が凶相や易卦の相対を重視して、覚範の言葉を第四位を偏中至にする為の根拠としてのみ取り上げていることと大きく異なり、覚範の疊変説自体の影響を受けたものと言えるが、南英は必ずしも完全に覚範の説を踏襲してはいない。すなわち、

蓋按之變未_レ尽。何則祇論_レ離之互体四爻回互之變。而不_レ及_レ初上之變_レ也。若言_レ重離四爻偏正回互_レ則可也。不可_レ言_レ六爻偏正回互。如是。未_レ得_レ密傳_レ者之說乎。雖_レ互_レ麼。離之互体回

互円転。回更相涉之理亦其妙哉。⁽²⁶⁾

と、覚範が最初に重離の互体から巽・兌を導いて、更に大過・中孚を出すのは、重離の六爻の内、中間の四爻のみを變化の対象とするもので、初爻と上爻の二爻が全く取り上げられていないことから、覚範の説では重離四爻による回互を述べてはいいても、重離の六爻によって変じ尽きているものとは言えないと批判しており、これによって南英は「疊而為三」を重離の初爻から順次疊んでいくことで巽・兌を導くことに訂正している。つまり、覚範の疊変説に全面的に従う事無く、むしろその問題点を指摘して「未得密傳者之説」と厳しく批判しており、南英の立場に全面的に覚範の説が重要視されたものではなかったことが窺われる。

ただ、ここで南英は覚範の説を批判しながら、「雖互麼」以下に、重離の互体による解釈の余地を、各位に展開する回互円転の働きを示すものとして認めている。筆者は、これを南英の覚範に対する部分的評価というよりも、「未得密傳」と覚範を批判しながら、南英自身の『重離疊変訣』には示されない、別の意義による五位説の性格を暗示するものではないかと考える。これは、重離から五位へと展開する具体的な疊変説の枠外にあるものとして、『重離疊変訣』の中でも何度か言及される「密傳」という言葉によって示される。

蓋雖_レ變_レ尽。不_レ是_レ離_レ離。総麗_レ乎_レ離_レ宮中。而回互_レ円転。如_レ環

無二端而已。雖二与麼。是祇離為三成五之様子也。更有二密伝。叨難_レ宣_レ。

ここにみられる「密伝」とは、重離が具体的な夬変によって五位の易卦に展開していく在り方は、その根本である離卦自体の中での回互円転による円収に他ならず、結局は離卦から出るものではないことを、具体的夬変による言説の相を越えて把握さるべき離卦の密事として提示されるもので、南英の本証上の立場からの宗旨的解釈と言える。そして、この「密伝」は、重離夬變の具体相を根拠付けるはたらきとして、先に挙げた覚範の重離の互体による分析と関連させることで、ある具体的な五位解釈として意図されていたものではないかと考える。そこで次に南英の「密伝」といわれる夬變説について、代表的著作である『頤訣耕雲註種月攘撫藁』によって検討する。

五 『頤訣耕雲註種月攘撫藁』における重離夬變説

『頤訣耕雲註種月攘撫藁』⁽²⁸⁾は、南英の師の傑堂能勝（一三五五—一四二七）との共著によるもので、五位説の原点である洞山・曹山の『五位頤訣』及び『揀語』を紹介したことを初めとして、中国日本を通じて、多様な五位説全般に渉る最も詳細な注釈書であるが、重離夬變説において本書は省灯の『凶説』や『重離夬變訣』の具体的夬變説とはかなり性格を

異にしている。いささか長い引用となるが、その全体が最も簡潔にまとめられている箇所を挙げる。

●○○●●●六爻也。註曰。重離者兼中到也。爻爻也。

師云。重離内互体。正中偏。●●●○。巽卦外互体。偏中正。

○○●●。兌卦但論四爻功位通例。而不_レ及_レ初上之定位。重離不_レ及_レ初上。則○○●●○○。大体有_レ正中來。○○●●●○○。

大過卦之象又内体●●●○。外体●●●○。離中虚德明也。中孚

卦新註云。中虚則心体虚明。大概体德離与_レ中孚相似。有_レ

偏中至●●○○●●。中孚之卦象。以_レ卦象見_レ之。偏中至為_レ

兼中至。亦不_レ乖。始至曰_レ至。本到曰_レ到。兼_レ帶前四卦之

象。而本到者重離一卦。兼中到。子細觀_レ察之。或問云。如_レ

師說。重離六爻。未_レ夬變。巽兌大過中孚之理。已祭_レ然於其

中。亦猶_レ朱子所謂自_レ混然太極。而兩儀四象六十四卦之理。

已祭_レ然於其中。若然費_レ工夫。用_レ夬變。作_レ甚麼。月云。重

離一卦具_レ四卦。是甚麼道理。古聖若言_レ四象八卦之理。已祭_レ

然於其中。而更不_レ垂_レ手。⁽²⁹⁾

これは傑堂(師)・南英(月)兩師の評釈であるが、ここでは覚範の説と同じく重離の内互体と外互体から巽・正中偏、兌・偏中正を導き、更にそれが重離の初爻と上爻を除くものであることを示しながら、互体となる二爻から五爻迄の四爻の姿が大過・正中來の卦形と類似し、重離の内体、外体の離卦は中孚・偏中至の卦形に類似するという独自のものであり、一見すると先程の『重離夬變訣』における覚範の説に対

する南英の立場とは矛盾せるかのようである。

しかし、この解釈は一般的な夬変説とは凡そ次元を異にしたものとしてみるべきであって、覚範、省灯らが重離の実際の変爻による五卦によって五位を説明しようとしたのに対し、「未夬変」すなわち夬変以前の重離卦自体が已に他の四卦に展開する卦形及び性質を内在していることを、朱子の理一分殊説に基づく太極の理と両儀四象の万物事象との不離不離の關係に相応させて説く、重離卦の本体論的夬變説とも言うべきものである。

このことは易卦の姿を万物の具体的展開の姿である爻に依らず、黑白の凶相によって示し、更に陰爻 \parallel 黒 \parallel 正位、陽爻 \parallel 白 \parallel 偏位という五位説の通例の凶相とは逆の凶相によって説くところにも窺われ、南英の言葉に

重離卦陰虚為 \angle 正。陽実為 \angle 偏。其理如何。云。不見 \angle 道。玄黄之後方位 \angle 自他。於是借 \angle 黒權 \angle 正。假 \angle 白示 \angle 偏。⁽³⁰⁾

とあるように、この説が玄黄 \parallel 正偏の回互以前の消息を離卦の体において捉え得ることが反映されている。

このような解釈は、五位説の中でも、その形式性から特に易学と密接な關係を元々強く持っていた重離夬變説を、更に当時の禅門全体に涉って盛んに研究された、宋学を中心にした儒学の論理的概念を用いて内容面から再解釈しようとする、ある意味で重離夬變による五位解釈の論外にある独自の

ものと言えるが、易卦の名称と五位との相応は『重離夬變訣』と同様に覚範の説を踏襲しており、あくまで具体的な重離夬變説を前提としながら、『重離夬變訣』とは別の意義による五位解釈を打ち出すもので、夬變説による南英の五位解釈の二面性が意図されているものと考ええる。筆者は、この『摭蕈藁』中巻における本体論的夬變説が、『重離夬變訣』で暗示された、重離の互体の回互による密伝としての解釈であったと推測するが、その夬變説の二面性は、そのまま『摭蕈藁』全体における南英等の二面的な五位解釈、すなわち第四位の偏中至と兼中至との併用の立場と密接に關係するものと思われる。先の夬變説で傑堂及びそれを注釈する南英が、「偏中至為 \angle 兼中至。亦不 \angle 乖」と『重離夬變訣』では全く言及されない、第四位の兼中至としての解釈を認めていることは、その証左であると同時に本体論的夬變説が、兼中至を易学的に解釈する『摭蕈藁』中巻で説かれる重要な理由でもあったものと考ええる。

『摭蕈藁』における第四位の併用による易学的解釈については、前に述べたこと⁽³¹⁾もあるのでここでは省略するが、朱子をはじめとする宋代易学の影響を受けて、兼中至を一易に当てて喚ぶことで、易の太極より二儀・四象・八卦の差別相に至る生成展開を順逆に捉えて、万物の有の差別相とその根柢である無の太極(兼中至)との關係を自在に回互させるはたら

きとして解釈する在り方は、そのまま疊変説における兼中至の解釈に相当する。傑堂は第四位を

師云。○偏中至●●○○●●●宗旨配陰於白。中孚卦中虚則心体虚明。偏中至之時偏位明。兼中至之時一易明。故圈児為純白。⁽³²⁾

と説いて、曹山五相偈にみられる圈児○を、偏中至では偏位の差別相として解釈し、兼中至では一易を説明するものと解釈するという、第四位の名称による解釈の相違を意識しながら、元々偏中至として解釈されてきた具体的疊変説を、兼中至とすることで逆にその本体論的疊変説としての意義を、他の兼中至を用いる五位説の論理的引証としている。

『摻撫藁』は第四位の名称において、上巻の「五位頭訣」の部分と中巻の易学的五位解釈との間に明確な相違をみせるが、これは重離疊変説による二面性ともかなり相応するものである。ただ、問題点として、偏中至を用いる『重離疊変訣』が実際の変爻による具体相を説き、『図説詰難』で省灯の五位説に対して常に洞山の「五位頭訣」や曹山の「揀語」等を根拠として批判し偏中至の根拠としているのに対し、『摻撫藁』の重離疊変説をはじめとする兼中至説は曹山五相偈等を中心に説かれてはいるものの、易学解釈の他は明確な五位文献を根拠としておらず、本来兼中至の文献的根拠となり得るはずの汾陽・慈明等の『人天眼目』や各師の語録等に

収められる五位頌を全く取り上げていない⁽³³⁾ことは解釈の如何は別としても、易学解釈による兼中至を取る五位説(本体論的疊変説も含む)の性格がそれらと凡そ異なるものであることを示しており、南英等にとっての兼中至説が必ずしも文献的な論証に基づく事無く、むしろ逆に「密伝」的性格のものとしてかなり重要な位置を占めていたことが窺えるものと考え

六 おわりに

以上、重離疊変説における省灯・南英等の五位解釈について考えてきたが、全体的傾向としては、当時の五位説解釈が易学を中心とする儒学、とりわけ宋学の流行によって、その影響を思想的に深く受けながら展開していったことが窺える。となれば、従来まで考えられてきた中国における五位説の解釈における第四位の名称による異説や正統というような段階性を基準とする宗旨的判断は、少なくとも日本においてそのまま用いることはできず、むしろ五位説を易学等の外典によって再解釈するという立場の上に展開されるものと考えなければならぬと思われる。

但し、このような状況はともすれば、易卦と五位との整合性のみを徒に追い求めることで、本来の内容的解釈の論議が希薄になる傾向を持っていた。省灯が行なった疊変説は正に

そのような路線にあるものであり、第四位の偏中至を説きながら、その内容解釈は雲外の兼中至説の跡を残すという後代の基本的視点からは矛盾する性格を具えていた。

又その省灯に厳しい批判を行なう南英は、易学的立場にたつ兼中至説と、その本体論的解釈から差別相への展開を、本来の「五位顯訣」をはじめとする五位文献に基づいて説く偏中至説とを、いわば二層的に併説することでそれぞれの意義を隔別するのではなく、融通させて解釈しようとするものであった。

多くの点で取り上げるべき問題点を残してしまつたが、南英をはじめとする日本曹洞宗における五位説の置かれた立場を考えるには、多くの解釈上の前提となる諸問題が残っていることを確認することで、他日に期する始点としたい。

(1) 覚範は『智証伝』(正統蔵一一一巻)において曹山の逐位頌を紹介し、その中に自らの注釈を附しているが、その内、正中来・偏中至に対し「正中来、則独倡而未和。偏中至、則賓主叶和也」と述べている。これは、正中来で正位の尊貴の独尊を述べながらも未到の余地を認め、更に偏中至で正偏それぞれを融通回互して無罣礙なることを示すもので、必ずしも相対せず、兼中至に到る段階的解釈である。特に偏中至に対する解釈は、究極初位としての兼中至説の基本的性格であることが指摘

できる。その他、覚範の偏中至正統説に対する疑問としては、その最大の根拠であるべき洞山の五位顯訣を覚範は見えていない。『禅林僧宝伝』(正統蔵、一三七巻)中には「五位顯訣」の名を挙げながら、実際には「五位君臣偈」といわれる逐位頌を引く。

(2) 最も代表的なものとして佐橋法龍「正偏五位説の研究」(宗学研究一号、昭和三十一年)岡田宜法「日本禅籍史論」上巻一四六頁(昭和一八年刊)参照

(3) 佐橋法龍「日本に於ける五位説の変遷」(印度学仏教学研究 究一―一二、昭和二八年)参照。

(4) 右同書参照。

(5) 室町期の五位説の研究が、禅宗界全体にみられる儒学等の外典を盛んに取り入れていく風潮の中で盛んに行なわれたことについては、芳賀幸四郎「中世禅林の学問および文学に関する研究」久須本文雄「日本中世禅林の儒学」参照。

(6) 新井勝龍「易卦説と禅」(印度学仏教学研究、三三―二、昭和六〇年)には、性海見篇『曹山録』中の「五位旨訣」を最古のものとして挙げるが、筆者はこの『曹山録』は従来から言われているようにかなり偽録の可能性があり、実際に編集されたのは南英以後であるものと考ええる。拙論『顯訣耕雲註種月擦撫藁』について(宗学研究三七号、平成七年)参照。

(7) 『智証伝』(正統蔵一一一巻、一二四頁)参照。

(8) 現在残る異本としては次の二本が確認されている。(1)刊本、寛文八(一六六四)年刊、駒大所蔵、曹洞宗全書注解五所載の底本(2)写本、筆写年不明、但し巻末に「種月二十一世雪庭

宗白代」(宝曆八〔一七五八〕年示寂)の語有り。現在、原本所在不明。駒大図書館に曹洞宗宗典史料編纂会による昭和二年の写本所蔵。

(9) 延宝伝燈録卷二十七、参照。

(10) 曹洞宗全書注解五頁、二五二頁

(11) 右同書、同頁

(12) 右同書、二七八頁。

(13) この他にも南英の『三易讎校故致語』『重離疊變訣』『摺摭藁』等にも省灯の『図説』と「明峰下秘訣」が類似していることを指摘されており、南英にとってかなり意識されていたことが窺われる。

(14) 註10同書、二五四頁参照。

(15) 一陰、一陽を重ねて別の卦を生む方法は、省打自身が述べているように、朱子の『易学啓蒙』にみられる「加一倍法」の影響を受けたものである(右同書、二五七頁参照)

(16) 右同書、二五七〜二六一頁参照。

(17) 右同書、二六二頁参照。

(18) 右同書、二七一頁。

(19) 右同書、二六四頁。

(20) 実際は覚範の五卦、及び曹山五相偈の図相は相對してはおらず、省灯自身の疊變説において相對するように變更されている。すなわち、正中偏と偏中正、正中來と偏中至が各々反對となっている。

(21) 註9同書、二六六頁。

(22) 『図説』は雲外の易卦を五位全て紹介しておらず、第三位

南英謙宗の五位説に関する一考察(松田)

の易卦は示されていない。「月体納甲図」によれば月体である坎卦に当るが、重離疊變説において省灯が捉える時には日体の離卦に通じるものと考えていたものと推測する。又「八卦納甲図」全体がそのまま雲外自身の五位説であったかどうかは断定できないが、雲外の語として第四位に兼中至を用いる、月の満ち欠けによる段階的五位解釈が挙げられており、又易卦も省灯自身のものと全同ではないことからすれば、内容解釈の骨子は雲外のものともみてよいものと思われる。又撰述年不詳なれど駒大図書館に『五位雜抄』なる書が所蔵されており、その中に雲外の『曹洞旨訣繫辭』が含まれている。この書の中の五位と易卦の相應は省灯の図説のものとは異なり第一位より、震・巽・大過・中孚・重離と、第一位を除いては覚範のものと一致している。しかし、覚範の易卦では省灯が雲外の五位説についていう「從重離二出。變世之五卦」とはならないことから考えれば、この書の易卦については後世に變改された可能性が高いと考えられる。

(23) 「雲外曰。正中來虛位。真為無之法也。有無不涉。白月円満。於清淨海中。不出入。即如來藏中常円之月。縱經百千万劫。無有盈虧之相」。(註9同書、二六八頁)

(24) 重離疊變訣(文安三〔一四四六〕年撰)現在確認される異本は以下の通りである。(a)足利学校A本、室町末期写、後半に九華筆写本有り。足利学校遺蹟図書館蔵。(b)佐野文庫本、書写年不明、但し頭注に「天文十一」(一五四二)の語有り。新潟大所蔵。(c)大徳寺本、永録四(一五六一)年写、長野県中野市大徳寺所蔵。(d)駒大貴重書本、室町期写、駒大所蔵。(e)足利学

校B本、江戸期写、足利学校遺蹟図書館蔵。(f)駒大本、貞享三(一六八六)年写、駒大所蔵。(g)卍山本、卍山道白代書、石川県金沢市大乘寺所蔵。(h)蔵山良機本、享保一三(一七二八)年刊、蔵山良機編、駒大所蔵、曹洞宗全書注解五所載の底本。(i)函館図書館本、書写年等不明、函館図書館蔵。(j)龍谷大本、書写年等不明、近世写、龍谷大所蔵。

(25) 曹洞宗全書注解五、四三頁参照。

(26) 右同書、同頁。

(27) 右同書、同頁。

(28) 『頭訣耕雲註種月擦撫藁』の現在確認される異本は以下の通りである。(a)種月寺零本(御真述本といわれる)、無年記、上巻のみ、種月寺蔵。(b)道忠筆写本、写本(全三巻)、貞享五(一六八八)年写、無著道忠筆写、龍華院蔵、(c)慧空本、刊本(全三巻)、享保元(一七二六)年刊、寂然慧空編、曹洞宗全書注解五所載の底本、種月寺蔵。(d)盤梁本、写本(全三巻)、元文四(一七三九)年写、盤梁筆写、現在、原本所在不明。駒大図書館に曹洞宗宗典史料編纂会による昭和二年の写本所蔵。これらの異本についての若干の書誌学的考察については、拙論『頭訣耕雲註種月擦撫藁』について(宗学研究三七号、平成七年)参照。

(29) 曹洞宗全書注解五、一九〇～一九一頁。

(30) 右同書、一九一頁。

(31) 拙論『頭訣耕雲註種月擦撫藁』について(宗学研究三七号、平成七年)参照。

(32) 曹洞宗全書注解五、一九五頁。

(33) 易学的立場から兼中至を解釈する南英等が人天眼目等に載せられる兼中至を用いる五位頌等をどのように評価していたかは、『擦撫藁』においても明記されていないのははっきりしない。但し『図説詰難』で、雲外の兼中至を用いる段階的五位解釈に対し、「岫雲外者天下無隻之名師宗匠。蓋五位之判悖於曹洞家五位頭訣之旨。不可取為則也。」(曹洞宗全書注解五、二七〇頁)と批判し、その根拠として「五位頭訣曹山別揀云。夫先師所明偏正与兼帶等。用先師本意。不為明功進修之位。兼涉教句。直是格外玄談要絶妙旨云云。而今不可言功位。前修也。雲外宏智七世之笛窩叮嚀。巫峽兩慎勿昧朝暉。」(前同書、二六六頁)と、五位頭訣に対する曹山の揀語を挙げている。このことから考えれば、兼中至にこだわるわけではないにしても、段階的な境界の差を五位に認めて説く慈明・汾陽等の五位頌には否定的であったと考えられるのではないか。そして、このことから兼中至を指標とする五位解釈の問題点が指摘できよう。